

クローズアップ NGO・NPO

NPO法人オンザロード

世界の子どもたちに学ぶ場を 日本人に世界の遊び場を

6,000ドルで学校

NPO法人オンザロードが始まるきっかけになったのは、ひとつの旅。2007年7月、作家・自由人の高橋歩とともにインドのバラナシという街を訪れたときのことで。

バラナシはガンジス川のほとりに位置する古い都。この街でマルコと名乗る男と出会いました。身長150cmほどのずんぐりした体に黒い肌。イスラム系インド人であるマルコは僕たちが取った宿の雑用係で、チャイや朝飯を部屋に運んだり洗濯をしてくれたり、かいがいしく世話を焼き、僕たちはすぐに打ち解けました。

「家族を紹介する、家に来い」と半ば強引に連れて行かれた先は、入り組んで曲がりくねったバラナシ名物の細い路地の奥。貧乏長屋に6畳ひと間、昼でも陽が射さない穴倉のような部屋。奥さんに一番上が小学生くらいの子どもが3人、折り重なるようにして暮らす。奥さんを指してマルコはこう言いました。

「彼女はマザーベイビー、俺の奥さんじゃない。この3人も彼女の子どもじゃない。彼女が道で拾ってきて育ててる。彼女の夢は貧乏な子どもたちの学校を作ること。俺はそれをサポートしているんだ。稼いだ金はぜんぶ彼女に渡す。稼ぎが悪いから、今は3人しか面倒見れないけどな。」

ちょっと驚きました。まずマルコが告げた現実に対して。そしてそれを子どもたちの目の前で話す、ということに対して。She picks up from street.

子どもたちは英語ができないとはいえ、ニュアンスくらいは伝わるかもしれないし、日本だったら「実

はね」と声を潜めてささやくシリアスな話です。

「へえ、学校かあ。それはいくらかかるんだい?」とたずねると、マルコは「土地が3,000ドル、建物が3,000ドル」と即答したのです。

6,000ドル、(当時のレートで)約70万円。つまりそれは10万円出すヤツが7人いりゃあいってことだろ。それくらいならできるよな、もうここに2人いるわけだし。

そんな思いつきを告げると、俺も今それを考えてた、と歩は言いました。

翌日、マルコとマザーが学校をやりたいというガンジス対岸のビレッジへ。

のどかな田園風景にリキシャを停めると、わらわらと子どもたちが駆け寄ってきます。カメラを向けると大騒ぎ、首も座らない赤ん坊やら嫌がる小ヤギを抱えて「僕を撮れ、ワタシを撮れ」と押し寄せる。マルコの一喝で一瞬静まり返るも、しばらくすれば元の木阿弥。とにかくウザいほど元気がいい。僕らはすぐにこの村が気に入りました。

どうせなら3階建てにして、1階は学校、上階はゲストハウス。世界の旅人が泊って子どもたちに何かを教え、マルコに宿代を払えばそれが運営費になるだろう。夢は大きく膨らみます。

スクール&ロッジ・プロジェクト

日本に帰ってそんな話を友だちにすると、「いいねえノット!」と即答する人、「だいじょうぶかよソレ、騙されてんじゃねえの?」と眉をひそめる人、反応はそれぞれ。確かに、騙されているかもしれない。でも10万円で買える夢としては、宝くじよりはるか

に楽しいんじゃないかなあ。そうして20名を超える人たちが賛同してくれ、「スクール&ロッヂ・プロジェクト」と銘打った企画がスタート。2008年5月10日から1カ月にわたり、のべ83名の日本人ボランティアがバラナシに集まり、レンガを積んで建物を作りました。

会社を辞めたり休んだり、フリーターだったりニートだったり学生だったり、新婚旅行の新米夫婦、デリーで早速だまされて泣いちゃった女の子2人組。航空券を自腹で購入してプロジェクトに参加し、気温50度に近づく灼熱の中、膨大なレンガを運びコンクリートをこねて建物を作った日本人ボランティアたちの熱い気持ちと根性。異国の民との深い交流。地獄のようであり、同時に夢のような1カ月で2階建ての建物が完成したのです。



建設重機がないためひとつずつレンガを上階に投げて上げた

ある日のなにげないインド悪ガキたちとの会話。

「学校を作ってるの?」「そうだよ」

「ただって本当?」「そうだよ」

「僕も行ける?」「もちろん、誰だって行けるさ!」

こう答えた瞬間、子どもたちの顔に広がった満面の笑み、瞳の輝き。どんな教育をするかとか、子どもたちの将来とか、そんな小難しいことよりも「学校に行きたい」という日々の単純な喜びが実現すればいい。そんなふうに思いました。

2階建ての1階は教室、2階はゲストハウス。日本人を含めた世界の旅人たちが宿泊し、子どもたちに何かを教え、宿泊費で学校が運営される。そんな「スクール&ロッヂ」として、インド・バラナシの学校は無事開校。現在30名を超える子どもたちが月曜から金曜まで元気に通っています。



現在の授業の様子、旅人による特別授業を行うこともある

■ ジャマイカでの音楽学校づくり

インド・バラナシでの学校建築を終えて帰国した僕たちに、1通のメールが届きました。差出人は日本人の女性レゲエシンガー。そのメールには「ジャマイカの子どものために、音楽学校を作りたい」という彼女の夢が綴られていました。偶然にもジャマイカ行きの計画を立てていた僕と高橋歩は、キングストンで彼女と合流。孤児院やフリースクールを見学したり、学校候補地を探す中で、ジャマイカ現役大統領の息子であるスティーブン・ゴールドインと出会いました。彼もこのプロジェクトに賛同し、彼の管理する古い建物を使おうという話に発展。2009年3月20日には日本人ボランティア20人でキングストンを訪れ、現地のサポーターとともに建物の改修工事。屋根を吹き替え、床を張り替え、ペンキを塗り、2週間ほどで美しく蘇った建物で、ジャマイカのプロミュージシャンたちが教える無料で通える音楽学校をスタートしています。



治安を考慮し、専門技術を持った少数のボランティアで改修した

■ NPO法人「オンザロード」をスタート

世界に学校と旅人の宿をつくる「スクール&ロッヂ・プロジェクト」を広げていくため、今年NPO法人「オンザロード」をスタートしました。これは「恵まれない子どもたちのために学校を」という慈善事業と同時に、恵まれすぎて明確な生きる目標をつかめないでいる日本の若者たちに「リアルな旅の機会」を与えたいという目的があります。

マザーテレサのように、自分の人生を弱者の救済に捧げようとは思わない。でも、自分たち自身が世界を旅する楽しみを味わいながら、それによってどこかの国の子どもたちが笑顔になれば、もっとおもしろいと僕は思うのです。

舞台は地球。さあ、一緒に遊びませんか!